

鳥追い

行事の歴史に迫る

当時の記憶

70年以上前の鳥追いを 茂野貞一さんに伺いました

1月18日(日)にNeo神立っ子と神立地区館が主催し「小正月を楽しもう in 神立」が開催されました。地域行事の減少により住民間で交流の機会が少なくなつたことから、神立地区の町内会合同で開催され、今年で2回目です。会場の湯沢学園第2グラウンドには、子どもから大人まで約250人の地域住民が集まり、魚沼神社の宮司のお祓いのもと、しめ縄などをお焚き上げ(賽の神)し、その周りを子どもたちが「鳥追い唄」を歌いながら回るなど、伝統行事に親しみました。

時代とともに変化している地域行事ですが、今回の特集では子どもたちが主役となる「鳥追い」に焦点をあて、今と昔との違いやその歴史や意味について、ひも解いていきます。



昭和20年代、私が子どもの頃、上熊野と下熊野は分かれておらず熊野町内として鳥追いを行っていました。鳥追いは町内単位で動くもので、当時は小学4年生くらいから中学3年生の子どもたちが主体で行うものでした。私も4、5年生の頃に鳥追いの仲間に入りました。中学3年生が親方になって全体を仕切り、6年生は小学生の親方となって仕切っていました。

私たちが作っていた鳥追いの洞は2間(3・6m)四方くらいで高さは2mと大きなものでした。熊野町内では夏場に雪を売っていた方がいて、その家には石で囲われた大きな雪室があり、そこへ雪がためられていました。そこから、大きいのがざりでプロック状に雪のかたまりを削り出して、竹のそりに5つか6つか乗せて運び、それを積み上げて外側を作り、内側には周りの雪をつめて、3〜4日かけて洞を作りました。洞の中に5〜6人が入れるほどの横穴を掘ってかまぐらの様にしていました。そして、子どもたちがしめ縄を集めに町

内を回ります。その際、しめ縄だけでなくお菓子やスルメ、少額のお金を紙に包んで持たせてくれる家もありました。

あとは、今と同様にしめ縄を燃やして鳥追い唄を歌いながらその周りをまわったりスルメを焼いて食べたりしました。

ただ、私たちはやっていますでしたが、私たちがより年上の世代は中学2〜3年生になると鳥追いの日に洞で寝泊まりなんかをしていたようです。洞の中で遊んだり、鳥追いをやっている他の町内の洞へ遊びに行ったり、子どもたちが夜更かしをできる日でした。

今では大人が主体となって準備を行っています。大人が見守る中で子どもたちが中心となり鳥追いを運営していた時代がありました。



茂野 貞一さん

湯沢町で生まれ育ち、40年以上、旅館業に従事された茂野さん。歴史が好きなことから退職後に趣味で町の歴史を収集・編さんし、町の観光ボランティアや小学校の修学旅行生に湯沢の歴史を伝えるなど活動されました。

三俣地区「しめ焼き」とは

三俣地区で開催される「しめ焼き」は「賽の神」と同様に無病息災を祈り厄を落とす小正月の行事です。子どもたちが各家を回り、集めたしめ縄を燃やします。

約60年ほど前は三俣・大島・八木沢町内がそれぞれの町内にある神社を会場に行っていました。また、しめ縄と一緒に5円玉などの穴の空いた硬貨も入れて燃やし、燃え残った硬貨をお守りとして持つといった風習もあったそうです。

現在は、三俣地区全体で地区館行事として三俣小学校を会場に行われています。



1月12日(月・祝)に開催された「しめ焼き」の様子